

金成マツ筆録 アイヌ叙事詩

# 許婚が我に向かって戸を縛り付ける

ikoshikup mat ikoabashima

萱野志朗 訳

北海道教育委員会

許婚が我に向かって戸を縛り付ける

ikoshikup mat ikoabashima

## 目 次

### 凡 例

あらすじ……………5～26 頁

### 許婚が我に向かって戸を縛り付ける

ikoshikup mat ikoabashima

翻訳 萱野志朗

#### 《許婚が我に向かって戸を縛り付ける》

1. 戸口に縛り付けられて育てられた私…………… 29 頁 [1935 : 1031]
2. 育ての兄と別々の寝床で寝ることになる私…………… 31 頁 [1997 : 1061]
3. 手先が器用になるようにと言われる私と私の姉…………… 31 頁 [2022 : 1073]
4. 私、手先が不器用であると思われたと感じ、泣き喚く…………… 32 頁 [2038 : 1081]
5. 私の誤解…………… 34 頁 [2123 : 1125]
6. 兄の冗句…………… 37 頁 [2199 : 1167]
7. 兄から聞く先祖の話…………… 38 頁 [2242 : 1190]
8. 両親の言い遺した言葉…………… 40 頁 [2319 : 1230]
9. 私と断崖の神が会うための兄のはからい…………… 42 頁 [2364 : 1254]
10. 嫁入りを嬉しく思う私…………… 44 頁 [2446 : 1296]
11. 家を作る兄…………… 45 頁 [2478 : 1312]
12. 交易へ出る育ての兄…………… 47 頁 [2533 : 1340]
13. 育ての兄の不在を寂しく思う私…………… 48 頁 [2590 : 1368]
14. 年若い私の姉、私を戸口に縛り付ける…………… 50 頁 [2628 : 1389]
15. 兄、家に戻る…………… 52 頁 [2712 : 1433]
16. 年若い私の姉の告げ口…………… 53 頁 [2738 : 1447]
17. 怒って私を煽り立てる育ての兄…………… 57 頁 [2854 : 1508]
18. 交易船の中に入れられ、流される私…………… 62 頁 [3023 : 1600]
19. 漂着した私をいぶかしむ年若い少年(勇者)…………… 69 頁 [3258 : 1724]
20. 年若い少年(二人目)の語り…………… 77 頁 [3517 : 1857]
21. 私を生き返らせるようせがむ、年若い少年…………… 80 頁 [3615 : 1904]
22. 元気になった私…………… 83 頁 [3738 : 1963]
23. 食事がのどを通らない、私の弟…………… 90 頁 [3971 : 2071]

24. 私、漂流の顛末を知る.....	91 頁	[4001 : 2086]
25. 私、トミサンペチシヌタプカ村へ戻る.....	103 頁	[4368 : 2265]
26. 育ての兄、己の行いを悔いる.....	116 頁	[4810 : 2499]
27. ポンモシリウングル (神のようなお方)の語り.....	120 頁	[4939 : 2567]
28. 狐神のたくらみと死.....	123 頁	[5044 : 2622]
29. 断崖の神に感謝する私.....	127 頁	[5177 : 2693]
30. 育ての兄、断崖の神を招待することを提案する.....	130 頁	[5290 : 2755]
31. 育ての兄と年若い私の姉を看病する私.....	131 頁	[5328 : 2777]
32. 酒宴を喜ぶ私.....	133 頁	[5394 : 2811]
33. 断崖の神、育ての兄とポンモシリウンマツの結婚を勧める.....	144 頁	[5762 : 2992]
34. 年若い私の姉、ポンモシリウングルの年上の男と結婚する.....	146 頁	[5820 : 3023]
35. ポンモシリウングルの年少の男の恋煩いを気の毒に思う私.....	148 頁	[5890 : 3059]
36. 同族の人たちの結婚を心の底から喜ぶ私.....	149 頁	[5934 : 3082]
37. 夫婦となり互いを祝福する私と断崖の神.....	156 頁	[6158 : 3211]

## 凡例

### 1. 原ノート

萱野茂二風谷アイヌ資料館に収蔵されている「金成マツノート整理番号29」の ikoshikup mat ikoabashima 「許婚が我に向かって戸を縛り付ける」筆録：金成マツ（昭和9年8月26日）の44～140頁のローマ字筆記体の判読・片仮名化・逐語訳・意識（日本語訳）をしたものである。97頁の分量である。

本書には、原ノートの頁の始まりを左上に示している。

### 2. 金成マツノートの整理方法

- 1 段目 ローマ字のアイヌ語の原文
  - 2 段目 片仮名表記
  - 3 段目 逐語訳
  - 4 段目 意識
- となっている。

- ①筆記体のローマ字を判読する際は、原ノート通りの表記とした。
- ②片仮名表記は、原ノートに濁音で書かれているものは表記通りとした。
- ③原文ローマ字段の数字は原ノートの行を累計で示している。44～140頁は原文ノートの頁を示し、その頁の最初の行のところに付記した。

### 3. あらすじの地名、人名の表記について

本文では「トミサムベチシヌタブカ」とされているのを「あらすじ」では「トミサンペチシヌタブカ」とし、「ポンモシリウングル」は「ポンモシリウングル」、「ポンモシリウンマツ」は「ポンモシリウンマツ」とした。他のものも「m」は「n」と置き換えカタカナ表記した。



## 許婚が我に向かって戸を縛り付ける

ikoshikup mat ikoabashima

筆録：金成マツ 昭和9年8月26日

あらすじ

萱野志朗

### <登場人物>

1. 私（主人公・女性）
2. 年若い私の姉（私の従姉妹）
3. 私の育ての兄
4. トミサンペチシヌタツカの主（「私の育ての兄」の父）
5. チャシパウンマツ（「私の育ての兄」の母）
6. 両親（トミサンペチシヌタツカの主とチャシパウンマツ）
7. 年若い少年（勇者）\* 8の弟か？
8. 年若い少年（二人目）
9. 私の悪い弟\* 7と同一人物か？
10. 年若い女
11. 年若い男
12. ポンモシリウンクル（神のようなお方）
13. 断崖の神
14. 狐神
15. 断崖の神の妹
16. ポンモシリウンクルの兄弟
17. ポンモシリウンマツ

### 「私の語り」

年若い私の姉（女同士の従姉妹）が私を戸口に縛り付けて、私は育ての兄に育てられて暮らしていた。私の育ての兄は、私と年若い私の姉の二人を自分の懐でまるで自分の子供のように育ててくれた。この大きな家の内部は神の宝物で飾られていて、私はその様子に感心し驚嘆の念を覚えた。移動自在の黄金の寝台は、宝壇の手前に置かれている。

夜になると私と「育ての兄」と「年若い私の姉」の三人で抱き合って寝た。私の育ての兄が「年若い私の姉」に向かって振り向くと、私はその背中を爪で引っ掻き、激しく痛めた。私の方に「育ての兄」が振り向くと、後ろから「年若い私の姉」がその背中を同じように爪で引っ掻くので、「育ての兄」はのたうち回った。昼になると寝床から私たち三人は出て、炉のそばに行き座った。私の育ての兄に良い食事を作り食べさせ、私たち三人は笑い合い、

賑やかに暮らし、毎日をこのように過ごし、今では三人はもう大きく成長し、大人になった。

### 「育ての兄の語り」

「よく聞きなさい。私の妹たちよ、女と呼ばれるくらいに成長した者は男と一緒に寝床で寝てはいけない。これからは別々の寝床で寝ることになるのです。」と。

### 「私の語り」

私は右座の衣装掛の竿の下で寝るようにと「私の育ての兄」から言われ、「年若い私の姉」は左座の布で仕切られた部屋で寝る事となった。

### 「育ての兄の語り」

「これからあなたたち二人がしなければならないのは炊事や掃除と針仕事なのだ。上の方の衣装掛けの竿や下の方の衣装掛けの竿が撓（たわ）むくらい、とても立派な刺繍衣をたくさん二人で作rinaさい。大いに手先が器用になると共に技芸を磨き込みなさい。」と言った。

### 「私の語り」

昼間は私たち二人できれいに部屋の中を掃除し、食事作りの腕前を鍛え上げた。夜には、ひとり身である私は独り寝が寂しく思い、「育ての兄」と一緒に寝ることが出来れば嬉しいと考えたが、実際には寝ることはできず、一人で泣いて枕を涙で濡らした。

「年若い私の姉」（私の従姉妹）は、私よりも年上なので独り寝も寂しくないらしく、年上の女なので、私よりも先にいろいろな事をする事が出来たので、「育ての兄」から喜ばれたが、私はまだ幼く何もすることが出来なかった。私は大きい袋や小さい袋と一緒に縮め、それらの袋に刺繍を施した。私が、それらの袋を「育ての兄」と「年若い私の姉」（私の従姉妹）に見せると、「育ての兄」は鼻の前と口の前に拳を当てて驚いていた。（アイヌ民族は、驚くと鼻や口から魂が飛び出すと考えており、それを防ぐために拳を鼻や口の前に当てる。）

私は、「育ての兄」は私の仕事振りに驚き、私の手先が器用であると、とても喜び褒めているものと思い、私は何だか縫えるかのごとく思い込んでいた。

私が「育ての兄」を見ると、後ろの方へ振り向き「ふふふふ笑い」や「ほほほほ笑い」をし、「年若い私の姉」（私の従姉妹）も同じように笑っていた。私は激しい狂気に駆り立てられた。そして、仰向けに倒れ、両足をばたつかせながらのたうち回り、さっと立ち上がって素早く走り回りながら泣き喚（わめ）いた。

### 「育ての兄の語り」

『自分の頭を掻きながら、「私の年若い妹」よ、驚いたが何故に尋常ではないくらいに泣いているのか。外や家の中の召使たちが言ったことを笑っただけなのに、あなたの事を笑ったわけではない。決して泣かずに、早く縫物をして下さい。』と。

### 「私の語り」

「育ての兄」の言葉をすっかり信じた私は、涙目を開きそれらの袋を一生懸命に縫った。件（くだん）の私がつくったものは、家の中や外の召使いの尻当てにされていた。それから二～三年の歳月が経過し、成長と共に遊びの胸紐を高い位置で結ぶようになった。私の手先

が不器用だと言って、あざ笑ったり嘲笑した「育ての兄」や「年若い私の姉」（私の従姉妹）も私の仕事振りに驚嘆した。私と「年若い私の姉」（私の従姉妹）の二人で刺繍した模様は、二つ三つの立派な雲となって立ち昇るようであった。「育ての兄」は、手びさしを高く、低く捧げながら私の手前で視線を低くして、目を伏せながら次のように言った。

#### 「育ての兄の語り」

『「私の年若い妹」は、以前は手先が器用であったが、今は不器用である。』と。

#### 「私の語り」

私は、「育ての兄」に言われたことに関して恥ずかしく思った。こういう状況で、私や「年若い私の姉」（私の従姉妹）を育ててくれた「育ての兄」に感謝した。「育ての兄」や「年若い私の姉」（私の従姉妹）たちの美貌や容貌は、どこかの国やどこかの村にも匹敵する者がいるだろうと思う程であった。呪術で三人とも全員が、薄くかける霧の中心へ身を隠していた。私自身も立派に育ち霧の中へ身を隠していた。「育ての兄」は今では男らしい容貌となり、尚一層神のような出で立ちであった。「育ての兄」が山で獲ったものは浜いっばいに寄り、沖で獲ったものは陸（おか）にいっばい寄り上がった。ある日のこと「育ての兄」は、次のように言った。

#### 「育ての兄の語り」

『よく聞きなさい。私の妹たちよ。私は、あなたたちよりも先に生まれた者なので、初めて先祖の話をするのでよく聞きなさい。この私の村の名はトミサンペチシヌタブカと言い、私の父は、この神の立派な御座所へ住んでいたのです。父は人間ではあったが、神よりも何でもすることが出来、更に美貌の持ち主であり、勇敢と雄弁を兼ね備えた人であった。父は、乳飲み子の頃から一緒に育った女・チャシパウンマツと連れ添って、この神の立派な御座所で祈ったのだ。チャシパウンマツは、天国の狼神の妹で神々の中から自分に相応しい結婚相手を探したが、見つからなかった。人間の国の中から探していたら、父を気に入って宝物と家と一緒に降りて来て、私の父と連れ添った。また、人間の女性が父に嫁入りし、私と「年上の妹」（「年若い私の姉」と同一人物）が生まれた。神のおば（私の母親の姉妹）から生まれたのが、「年若い妹」{私（主人公・女性）と同一人物}なのだ。

両親は、もう体も弱り死期も近いことを悟り、両親が神の国へ戻る前に、言い遺した言葉は次の様であった。

#### 「両親の語り」

「トミサンペチの遥か遠い川の水源へ神がお造りになった、悪い場所がある。その場所を人間の国を久しく見守るために代わる代わる神が降臨された。断崖の神の子どもと「私の年若い娘」{私（主人公・女性）と同一人物}と小さい頃から一緒に育てたのだ。そのことをあなたは知っているであろう。息子（「私の育ての兄」と娘 {「年上の妹」（「年若い私の姉」と同一人物}）が成長し、私の親族は多人数になったのだ。私の息子は、自分の気持ちに従い心の美しい女を選び連れ添って、私たちが神の国へ去ったあとに、トミサンペチシヌタブカを栄えさせなさい。私の年上の娘 {「年上の妹」（「年若い私の姉」と同一人物}）は、

あなたが気に入っている人を選び連れ添い仲よく暮らさなさい。」と。こう言いながら両親は、神の国へ旅立った、のだ。

### 「育ての兄の語り」

私たち三人は大人になり、私は妻も持つことが出来、「年上の妹」（「年若い私の姉」と同一人物）も夫を持つことが出来、私の年若い妹 {私（主人公・女性）と同一人物} は、神に連れ添うことになっており、断崖の神が一〜二度「私の年若い妹」、あなたを訪れるように思う、「魚心あれば水心」の例えの如く、神でも人間でも若者はそれと変わらずに恋心を感じるだろう。私の年若い妹 {私（主人公・女性）と同一人物}、あなたは神に連れ添い、神々の中へ行く事になるだろう。いつ何時、断崖の神が降臨されても、あなたが私から眼を逸らすならば、降臨の事実をあなたに私は話すことは出来ない。私は断崖の神を尊敬し、運が良くなり、なおかつ美しく小さい家を私が造りましょう。他の人はおらず人の目を気にせずに、私の年若い妹 {私（主人公・女性）と同一人物} と断崖の神は会うことができるでしょう。

首長あるいは淑女は、互いに話し合っ神の行いや淑女の行いが出来、神や人間から驚嘆され、神が恵をお与えになるのです。淑女の行いをする事によって、断崖の神はその陰で自身に汚れないようにし、神はあなたに敬意を払うようになるのです。例えば、すじのついた肉をあなたが見ると、犬でさえ、それを見て笑うらしい、と。今初めて気付いたが、私はこういう先祖を持つ者であることを分かっています。

### 「私の語り」

私は人間の風習に則り嫁入りするもので、嫁入りは良い事で私は嬉しく思った。私は神の夫に嫁入りするので、半分は嬉しく、半分は私に神の行いが出来るか否かが気がかりだ。「年若い私の姉」（私の従姉妹）は、この嫁入りを喜んでくれ、「育ての兄」は自分の親類へ連絡し、大勢の人々が集い、家の中で話し声がした。

### 「育ての兄の語り」

木を削る音がゴーゴーと鳴り響き、茅の擦れる音と衣擦れの音が響き、しばらくすると「私たちの家を造り終えた」と言った。「育ての兄」は、私に向かって「さあさあ、すぐにそこへあなたは暮らすことになる」と。

### 「私の語り」

「育ての兄」に家の完成を告げられ、私は「年若い私の姉」（私の従姉妹）の手に導かれながら戸外に出て、初めて住居の外側を見た。険しい丸山の上に黄金の家や城が重なり合うように建っておりとても興味深かった。家の東の方角、私の手に何かが触れる感触があり、そこには美しく小さな家があった。なぜかその家の胴部がきつく締めつけられていた。家の内部は、数少ない宝物で飾り付けられ黄金の床は光り輝き、炉には火が燃えており、右座側に「年若い私の姉」が私を座らせ、「育ての兄」は次のように言った。

### 「育ての兄の語り」

『幼い頃、私の父たちは殿の国に交易に行っていた。その交易品は神や殿様の持つ美しいものばかりであり、酒や殿の国の穀物などほんとうにたくさんの品々を舟に積み込み戻っ

て来るのだった。この交易は、私にとってとても嬉しい事だった。それゆえに私も交易に行くため、たくさん毛皮を集めてあるので、ここから殿の国との交易に何回も行き来し、たくさん立派な贈り物や立派なみやげを持って、戻って来るつもりです。「年上の方の私の妹」は、この神の立派な御座所を見守ることなのです。やがて私は年老いていなくなるだろう。

その時に断崖の神が帰って来るならば、「私の年若い妹」は、人間の風習に従い淑女の行いをする事によって、断崖の神と結婚するのです。』と。

熊の毛皮や鹿の毛皮をたくさん舟に積み、私は二人の男を舟と一緒に乗せ、私と男二人の計三人で遠い沖の方へ漕ぎ出した。

#### 「私の語り」

「育ての兄」と一緒に暮らし心強く思っていたが、今は「育ての兄」と別々に暮らすことになり、私は意気消沈していたが、これには特別な理由があると考え、私は強い心を持ち二～三日暮らしていた。その二～三日のあいだ「若い私の姉」は、家の中へ二～三度入った。

二つ三つの笑いをまじえながら二人で言葉を交わした。『「さあさあ、私を「育てた兄」が早く帰って来てほしい』と私たちは話していた。

#### 「年若い私の姉（私の従姉妹）」の語り

『明日は「育ての兄」が帰ってくるだろう』と言った。

#### 「私の語り」

「年若い私の姉」の話聞いて、私は喜び「早く明日を迎えたい」と思い、「育ての兄」のことばかりを考えて、少しも眠ることも出来ずとうとう夜明けを迎えた。夜明けと共に何者かが外から静かな音を繰り返して出していた。私は不思議に思い、南側の窓を通して見ると、「年若い私の姉」が怒った厳めしい顔付きで麻縄を使い何度も外の戸口を縛り付けていた。私には解（ほど）くことが出来ないくらい、入口が縄で縛り付けられていた。「年若い私の姉」は、忍び足で遠くの神の立派な御座所に入って行くようだった。「年若い私の姉」の不思議な行動で私は外に出られなくなり、「年若い私の姉」を呼び叫んでも何の返答もない。

召使いの一人も見えず私にはどうもしようがなく、囲炉裏の消えた火に向かって、私は静かに座っていた。夕暮れ時に、沖の波の上にいる「育ての兄」が、舟で物を運んでいる様子が聞こえてきた。

#### 「育ての兄の語り」

「わたしは、今初めて家に戻ります。私は交易のため不在となっていたが、そのあと妹たちは何を心配することもなく無事に過ごしていたのだろうか。私は、夜も昼もひとり身であって喜んでいて。けれども、あなた（妹）たちのことをいつも心配していたのだ。」と。

#### 「年若い私の姉（私の従姉妹）」の語り

神の立派な御座所である外の櫓（やぐら）から「年若い私の姉」が泣きながら次のように言った。『「育ての兄」が、これを聞くと驚き立腹するだろうか。「育ての兄」が交易のため沖の方に出たあと、夜も深まり村人は全員眠っていた。私の妹の家から人間の話し声がするので、断崖の神が降臨されたのだろうか私は思い、遠慮とともに様子を窺ってみるとほんと

うに驚いた。どこの村のどこの国の者であるか分からないが、私の妹と一緒に上座に座り、妹はその者に食事を用意し、二人で笑い合いながら過ごし、そのあと一緒に寝たのだ。私には妹の行動が不思議に思った。断崖の神と呼ばれる者であれば美貌だろうと思い、翌日妹の家へ行き、二人に会おうとした。私が妹の家の戸口や窓を麻縄で何度も何度も縛り付けたため、窓も閉められた状態のまま、私は妹に呼びかけたが何の返答もなかった。私はほんとうに不思議に思った。それから毎晩おなじように、私の妹は得体のしれない人間と暮らし、食事を提供し二人で笑い合っていた。その様子を聞いた私は恐ろしくなり、昼になると妹の家の窓や戸口をしっかりと塞ぎ、「育ての兄」が交易から戻って来ることばかりを待ち望み、私は心配しながら過ごしているのです。「育ての兄」よ、さあ早く、「私の妹」の家を訪ねて下さい。」と。

#### 「育ての兄の語り」

「私の年上の姉」の最後の言葉と同時に、私が叱咤する声が辺りに響き渡った。波打ち際の（舟の）上から小さい家に向かって「思った通りだ！」と言って、戸口を縛ってある縄を太刀でたたき切り、その縄をばら撒いた。私は、家の中へ跳び込み殿の国へ交易に行った神のような出で立ちで、その怒った顔付きは厳（いか）めしかった。

#### 「私の語り」

最初「育ての兄」を見て私は、きょとんとしていたが、「育ての兄」をよくよく見て、言葉で突き刺すように断ち切るように、「育ての兄」を煽り立てた。

#### 「育ての兄の語り」

『ほんとうに「私の年上の妹」は悪い者で、成長の過程で教えたにも拘らず、あん畜生の振る舞いで台無しにされた。少しのあいだ私がこの村を不在にただけで、どこの村の者、どこの国の者が来るのだろうか。良い風習や淑女の風習をあなた（「私の年上の姉」）が持っていたならば、人間や神がいらしてもその理由をあなたの妹（主人公の「私」）に伝えるはずだ。何ゆえにあなた（「私の年上の姉」）は身を隠し、あなたの妹（主人公の「私」）を泣かせ、心を傷つけたのか。「さあ、早く」後悔の念を述べよ。私は刀使いの達人で、もし言葉が早い者であれば話の最中に、言葉が遅い者であれば言葉の前に斬ることが出来るのだ。

自分の太刀の柄（つか）の上を握り、私は病むほどびっくりし、ただ聞いただけ見ただけではあるが、息さえ出来ないほどに驚きびっくりした。私は荒々しい言葉を飛ばし快哉（かいさい）を叫んだ。

#### 「私の語り」

「全く話してもしょうがない話である。毎日、「年若い私の姉」（私の従姉妹）は私の家に二～三度入り、戸口を縛ったのです。この事を「育ての兄」はどのように思うだろうか。嘘の理由もなく、私は、断崖の神と一緒に育てられたのです。

#### 「育ての兄の語り」

『私たちが交易に行ったとしても、神であるあなたは透視術で状況を見抜いていたはずだ。私は交易で不在となり、その時にあなたたちは私の村を訪れるだろう、と思ったところ、

本当に帰って来たのであるから、あなた（私＝主人公）が悪い。どこの村の者かどこの国の者かが、あなたの領地を通ったことを透視術で見抜いた結果、腹を立てて帰って来ないのであらうか。古い時代からずっと、私がトミサンペチシヌタブカを穏やかに治めていたのに、今は断崖の神が腹を立てひどい戦（いくさ）やひどい戦（たたか）いがトミサンペチへ向けて来るだろう。

忌々しい私の悪い妹（私＝主人公）あん畜生、私があなたに事の顛末を尋ねても、それを認めないのであれば、今からあなたを舟と一緒に流すことにしよう。ひどい悪天候によって舟は転覆し、海の底で腐ってしまうだろう。私の太刀一ふりで斬ることも出来るが、私には悪寒が走り、あなたの悪い血がこの場所を流れることによって、神々たちも背筋が寒くなるだろう。あなたを舟と一緒に流すことがいちばんよい。』と。

### 「私の語り」

「育ての兄」は、私の髪の毛を手に巻き付けて、軽々と小脇に抱え海へ行き、一艘の小さい交易船の中へ入れた。「私の育ての兄」、「私の育ての兄」よ、と私の声が美しく響き渡った。「育ての兄」は私の話を聞かず、腹を立てていた。「育ての兄」は、梶も棹もない小さい舟へ私を乗せて沖の方へ押し出した。この小さい舟は大海原の何処やらに流されて行く。

幼い頃から私（主人公・女性）は、神のような「年若い私の姉（私の従姉妹）」と一緒に育ち、私たち二人は仲良く暮らし、私は随分可愛がってもらった。「年若い私の姉（私の従姉妹）」は不意に嘘をつき、またとんでもない嘘を言った。「育ての兄」にしても「年若い私の姉（私の従姉妹）」の虚言を本当の事だと信じ、私は、「年若い私の姉（私の従姉妹）」の虚言を否定したが、私は舟と一緒に流され口惜しい思いをしている。

淑女の子孫である私が、残酷を極める死に方をしても、私の悪事で罰せられるのであれば、納得が出来るが、理由もない不当な扱いには我慢が出来ない。「育ての兄」も「年若い私の姉（私の従姉妹）」も私に対して残酷な仕打ちをしたので、私にはどうすることもできない。

どういう生まれで、どういう育ちの人が断崖の神なのであろうか。先祖代々と理由があったので、私は断崖の神と一緒に育てられ、私自身は汚れのないようにしていた。神々は理由もなしに私が罰せられる事を見逃したのだろうかと思い、私は泣き続け喉が塞がれ、虫の鳴き声のような声になった。夜も昼も小さい舟は、二～三の海の潮をあちらこちらに漂流し、私は毎日の食事もなくお腹が空きすぎて絶叫した。私は死ぬことも出来ず、幾日か経過し小さい舟は何処へやら叩きつけられた。何気なく見てみると立派な村であった。村の上面一体は平坦になっており、その村からの眺めは、沖に点在する小さい島を見渡せた。この小さい島の上に木幣が立てられていた。その木幣のすぐ近くへ私の小さな舟は打ち上げられ、岡の上で大破した。私は、その舟の中で身体を伸ばしていた。美しく屈いだ海の水面はずっと平坦になっており、屈の鳥や禽たちが潜って餌をあさる鳴き声がとても賑（にぎ）わしい。

何者かがはるか遠いところから舟に乗り鳥を追いかけて来た。その舟が水面を二つに割って進む音が響き渡り、波の上を滑って行った。その舟が私のすぐそばを通るとき、私の壊れた小舟を一瞥し、私の存在を認識した。その舟は美しく飾り立てられており、舟の中には

小さい霧の小山が立っていた。私は、呪術で二つ三つの霧の中心を散らして霧の中の人物を見た。私は「育ての兄」だけが立派な人だと思っていたが、その「年若い少年」は「育ての兄」に匹敵する美貌で、いや凌ぐ者であった。「年若い少年」は黄金の小袖を全身に襲ね着し、黄金の鎖を腰に巻き付け神授の宝刀を帯に差し、黄金の小さな笠の垂れた紐を自分できつく締めていた。小さい笠の縁の脇には太陽の光のように輝いた神々しい顔が見えた。勇者の顔つきで、私の周りにある二つ三つの霧の中心を散らして、私の顔を見ようとしたが、二～三度と失敗していた。その勇者は、どうにかこうにか私を人間の形にして私を初めて見て、勇者の顔がさっと青ざめた。その勇者は、私に向かって頭の上から足元まで目を凝らし私を探っていた。その勇者の顔色はとても美しかったのに、悪い性癖が顔のおもてに表れて来て、荒らしい言葉で煽りたてた。

### 「年若い少年（勇者）の語り」

『あなたの有様を見て不思議に思う。あなたは人間、あるいは魔神なのだろうか。何処から来た者なのだろうか。他に村や島がない訳でもないのに、私の寂とした静かな村、私たちが拝む大地に向かって来て、上陸し何をしようとしているのだろうか。あなたの素性を明かすようにお願いします。私は刀の達人なので、言葉の早い者なら言葉の最中に言葉の遅い者なら言葉の前に私は斬る。』と。自分の太刀の柄の上を手で抑えつけた。私たちが拝む大地であるけれども私の思い通りに私は戻ることもなかった。

### 「私の語り」

私が乗せられた小さい舟は、風や潮の流れで漂流し、この島の岡へ舳先が突き刺さるように漂着し大破した。村人がそれを見て知っていることを、私がどのような悪い心を持って、このように難破したのだろうか。痛い所を衝（つ）かれ、私はほんとうにびっくりした。「私は謝ります」と言おうと思った。毎日、私は食事もせず泣き続けていたため喉は塞がれ、声を出すことも出来なかった。私は、力が弱く息が切れてまるで死人のようであった。私は、思わず棹を手で持ち上げた。そして次のように言った。

『ああ嫌だ、私がこういう状況に置かれたのは、海の妖精、潮の妖精の悪神の仕業なのであろうか。私が、その悪神の陰口を言ったため、「私たちが拝む大地」の上に姿を現したのであろうか。死にたくて、くたばりたくてこのような事をするのだろうか。』と、言いながら二つ三つの荒々らしい言葉を自分自身に投げかけ、棹で自分自身を何度も打った。

このような仕打ちを受けなくとも、私は力が弱かったので、もう死にそうになっている。私は運が悪かったのか、人を嫉（ねた）んだのだろうか。今、私は諦めて早く死ぬことを強く望んだ。どこかの村の者か、どこかの国の者に私は生き返らせてもらい、事の顛末を斯く斯く然々（しかじか）と話をしたいと思うが、私の力が及ばず出来ない。どのような妖精が、私に仕打ちをし、死ぬばかりであるが、口悔しさと怒りの気持ちが沸き立ったが、私には伝えることも話す事も出来なかった。私は自分自身を殴り、窒息しそうになり、息は絶え絶えとなりながら、声を振り絞り次のように言った。

『今にも悪い妖精は息が切れそうになり、私はまだ小さいので、妖精を神の国へ送る方法

を知らない。私は、「年若い私の兄」に従いましょう。』と。口の中で唱え、遠くへ舟を出し戻った。私は、心の中で泣いた。

私は「育ての兄」に「お前は海底の死者の国で朽ち果てる」と言われた事が口惜しいと思った。陸（おか）の方から、何者かが舟を走らせて来る音がした。思わず私とその舟を見ると、件（くだん）の舟の中には小さい霧の小山が立っていた。私は、二つ三つの霧の中心を呪術で撒き散らし顔を見てみると「年若い少年」だった。先にやって来た「年若い少年」（勇者）と同じような着物や刀を佩（は）いていた。目つきや眉の形なども似ており、美貌や勇気において、その二人は優るとも劣るとも言えなかった。先にやって来た「年若い少年」（勇者）と同じように、私の周りを覆っている霧を散らして私を見た。二人目の「年若い少年」は、私の頭の天辺から下半身の足元まで何十回と目を凝らしてみた。その「年若い少年」は、私の手前へ視線を落とし、小さい破壊された舟などを見て、不思議そうにしていた。

#### 「年若い少年（二人目）の語り」

『私は、この有様について不思議に思う。私の悪い弟、あん畜生は馬鹿で賢くない者でとんでもないことをした。「年若い少年（勇者）」は、海の妖精、潮の妖精が小さい島へやって来たので叩き殺した。この妖精を神の国へ送る方法を知らないと報告があったので、私は驚いてこの島へやって来た。人間のような神のような女の親族がここに暮らしている。二つ三つの村には手先の器用な人がいて、この小さい舟もその人によって作られた。私は、その噂を聞き、陸（おか）の男が作った舟と見ている。どこでも大きな戦（いくさ）があり、お互いに亡骸を作り、命辛々逃げて来た。私が、私の悪い弟のそばを横切った時に、弟は私に「決して喧嘩をしないように」と先ず告げるべきだ。

#### 「私の語り」

「年若い少年」（二人目）は、腹を立て叱咤する声が巡ってきた。そして、私を抱きかかえ、小さい島の上へ跳び上がり、トミサンペチシヌタヅカ村の真ん中まで飛んできた。私は死人であるけれど、村の真ん中にある険しい丸山がそびえ立っているのが見えた。丸山の上には大きい家や大きい城が重なり合うように建っていた。家や城の外側は、美しく飾り立てられ、私はその様子に感心した。土台付きの黄金の小さな板造りの家の立つ様子は厳（いか）めしい。神のような「年若い少年」は、私を小脇に抱えたまま、櫓の上に立って件（くだん）の黄金の小さな板造りの家に向かって、荒々しい言葉で煽り立てた。

#### 「年若い少年（二人目）の語り」

「二つ三つの悪口雑言をぶちまけた。『とんでもない妖精がいたが、私の弟はどこでみたのだろうか。私が穏やかに治めていたトミサンペチシヌタヅカ村であった。昔からこの首領は陸（おか）の人たちにも勇気があると恐れられていた。私の悪い弟、あん畜生、首長はまず先にしっかりと見て、それから年長の私の話をよく聞くべきなのに、他人の女の親類を自分の考えで殺した。その殺し方も残酷を極める殺し方だった。さあ、早く来て、生き返らせてくれ。』と。」

### 「私の語り」

家のそばでは「ドシン、ドシン」と跳ねるような音が鳴り響いた。

玄関の入口（物置を兼ねるところ）で向きを変えると、神と家宝の香りが烈風のごとく押し寄せ、その圧力で後退させられた。垂れ下がる簾戸はきらきらと光り揺れていた。外の庭の上に霧と光とともに入って行った。大きい家の中には、うつばりの下には神の宝がぎっしりと詰まっていた。黄金の床はずっと平坦になっていて、右座には小さい霧の小山があった。呪術で霧を払いのけ見てみると、私の従姉妹娘である私の悪い姉と同じくらいの年恰好の女だった。その年若い女は、美しく飾り立てて育てられた様子だった。黄金の立派な刺繍衣で身を包み、髪の毛は絹糸のように頭を覆い、その髪は光り輝いていた。その女の顔は、神々しく日の光のように輝いていた。しかし、二つ三つの悲しい顔色でうな垂れていた。神のような方（年若い少年、二人目）が、年若い女の両膝の真ん中に私を放り投げた。

### 「年若い少年（二人目）の語り」

次のように言った。『さあ、私の妹よ、このよその年若い淑女を生き返らすことを手伝ってくれ』と。

### 「私の語り」

年若い女は、私を見て激しいイム（陽性ヒステリー）と軽いイムを繰り返した。私は、そのイムの声を聞き、夢心地で気が遠くなって死んだのか、眠ったのかが分からなかった。私は意識朦朧となり、二つ三つの間をおいて自分で覚醒しようとしたが、二つ三つの夢のように気が遠くなった。しばらく経って、私は意識を取り戻した。年若い女が歌った歌は、神が天に昇る時のように美しく響き渡った。二つ三つの細長い手草で私を包み込んだ。神のようなお方（「年若い少年」（二人目））は、外と家で跳ねて、二つ三つの神の先祖の根源を明らかにしながら、私に神の祈りを捧げた。年若い女は、私の小さな乳房を顕わにし、二つ三つのひそひそフッサをしながら（その胸を）叩いた。このフッサによって、私を生き返らせる風となって、私の心臓の頭と下手は伸び伸びとし、私はほんとうに気持ちが悪くなった。

囲炉裏のそばで私は顔を上げ、私は遠慮とともにずって這って、左座の隅の下座へたどり着き小声で泣いた。若い女は、私に二つ三つの良い事を教えてくれた。そして、囲炉裏の前へ座らせてくれた。私は、どこかが痛く、全体に柔らかい感じがした。年若い女は、良い薬を作ってくれて、大きくあるいは小さい一口で飲み込んだ。私はほんとうに元気になり、髪の毛の端を床にびたりと付けて、神のようなお方（「年若い少年」（二人目））は、横座に座った。年若い女は、下座へ行き二つ三つ水の水滴を滴（したた）らしながら良い食事作りに精を出し、三つの豪華なご馳走を作った。私に捧げられた食事を取り本当に元気になった。

皆全員で本当に喜んだ。二～三日経過すると、年若い女は、絹織物を取り出し私の傍に置いた。私は退屈だったので刺繍をしたが、その刺繍した模様は二つ三つの立派な雲となり立ち昇った。年若い女は、私の作った物に驚嘆し、私に対して恐れ慎んでいたもので、話しかけることも無かった。神のようなお方（「年若い少年」（二人目））は、移動自在の寝台の上に座り、刀室や剣室の彫刻に一心不乱に励んでいる。私がつくった二枚の着物を重ねて、衣装

掛けの上手に掛けた。その着物の上には、二つ三つの神光が明るく輝いている。神のようなお方（「年若い少年」（二人目））に向かって、次のように私は言った。

『私は違う村で生まれた者であるが、私は何かの理由により舟に乗せられ流され、小さい島へ行き、このように生き返させてもらい、ほんとうに感謝しています』と。

『今はもう、私の村へ戻り、いずれそのうちにお礼に参ります。まず、私の方に向かって来て、私を討った勇猛さを見てみたい。私はあなた（「年若い少年」（二人目））を恐れ慎むけれど、私が自分の村へ戻る前のちょっとの時間です』と。

神のようなお方は、咳ばらいを一つしながら右座のそばへ座った。

#### 「年若い少年（二人目）の語り」

『私の妹よ、私の悪い弟を大声で呼ぶように』と聞いた。

#### 「私の語り」

年若い女は、言いつけ通り跳び上がり外へ出て行った。しばらく経過してから、年若い女は、涙ぐみながら家に戻ってきた。

#### 「年若い女」の語り

『「年若い私の兄」よ、お聞きください。私の弟君は、神の所で食事をしているものだと思っていたが、神の年若い淑女が「年若い私の兄」（「私の弟」と同一人物）をこの場所へ連れて来た。その行為を後悔し、今までじゅうぶん食事もせずに寝込んでいるのです。私が、「年若い私の兄」（「私の弟」と同一人物）へ「斯く斯く然々」と伝えたと、とても驚いていたが、もうすぐやって来るでしょう』と。

#### 「私の語り」

家のすぐそばで黄金の下駄を引きずる金属音が響いた。太刀の鏝の音が美しく鳴り響き、玄関の入口（物置を兼ねるところ）で向きを変え、訪問の礼儀である「咳払い」をして、武器の触れ合う金属音とともに簾戸を揺るがしながら何者かが入って来た。その男は私の後ろを通り抜けた。私は顔も上げず髪の中の端は床につけたままだった。その男が横座に座る音が鳴り響き、私は初めて髪を裾をかき分け顔を見た。じゅうぶん食事をしていないとは、聞いていたが人間の顔とは言えないくらいであった。その勇者は、ずっと食べていないので顔の骨は上を向いて突っ立っており、手は潰れた茅、足は裂けた茅のようで、顔色がすぐれず萎れた様子だった。勇者の様子は気の毒に思ったが、私の方へ顔を上げることもなく、襟首の上から消え失せるかの如く俯いていた。年長の人も妹も一緒に困惑し、みなで一点を凝視していた。私は次のように言った。

『神のようなお方、よく聞いて下さい。今、初めて私の村のことを話します。「なんという村で私は生き返させられ、毎日病気ではないが暮らしていたが、効き目がなかった。私は、私の村へ戻って見聞きをしてから、神のようなお方に返報するつもりなのです。私の村の名はトミサンペチシヌタヅカであり兄弟姉妹がいて、これ程までに成長したのです。私は何か神に罰せられるような悪事は一切していないが、何らかの理由で「私の育ての兄」が舟と一緒に私を海へ流したのだ。首長の村（私たち祈る村）へ舟で漂着し、舟は大破してしまった。

私は、毎日食事も取れず本当に死ぬところであった。年少の男が来て、私にいろいろ尋ねたが、声が出ず話すことが出来なかった。更に私はひどく痛めつけられたので、悪い死に方をするだろうと思っていた。私は、運が悪い者で呪われた者であると思っていたが、神のようなお方が、「私が神の風習を持つ者」であると見抜き、事の次第を知らせて下さった。私を可哀想に思い、神の立派な御座所に入れてくれ、神のようなお方の妹と二人で生き返らせてくれた。そのお陰で生きながらえて、私は女であるが何一つ恐ろしいものはない。これから自分の村へ戻って、私の悪い人たちにお礼参りをするつもりだ。年少の男は、私の事を可哀想に思い眠ることも出来ず憎んだであろう。私は、よく考えて聞いてみると、どのように言われても、私の悪い人の料簡や事情を承知しているが、少しも腹を立てることが出来ない。

私は、腹を立てるところもない。どんなに私が悪く言われようが、年少の男が私を見つけてくれたお陰で生きながらえる事が出来た。私は、いちばん年少の神に感謝している。私は、美人ではないが、神のようなお方に炊事の用意をしようと思っていたが何も出来ずにいた。

大きな理由から、私は幼い頃から許嫁であると言われた男と一緒に育てられ大きくなった。その男にはまだ会っていないが、一生涯のあいだ私は貞操を守って来た。その途中にこのような事となり、私は運が悪かった。神でも人間でも知っていることだが、何も悪い心を持っていない人間の女であるが、私の手作りの着物を、私の許婚に着せましょう。

私は幸いにも首長の村へ流され、あなた（神のようなお方）に助けられた。あなたも一生涯心に傷を負うでしょう。返報の印を渡します。私は年上の男の妹と一緒に私の村へ戻り返礼します。

件（くだん）の私が刺繍した着物を大きく畳んだものを神のようなお方の膝の上へ差しのべた。神のようなお方は前屈みになり、膝の上の物を高く低く捧げ、拝礼した。類い稀な勇者は、耳を傾けて、二つ三つの声なき涙を流した。年若い女も二つ三つの泣きの涙にかきくられた。年上の男が私の方へ手を高く上げて挨拶した。

### 「年上の男の語り」

あなた（私、主人公）は、人間と言うけれど、ずっと昔から神よりも評判になっていて、陸の人の神と言われ、気づくと子孫も神のような風貌だった。幸運にも私の村へ来て、私の悪い弟の愚かな行いが原因であったが、あなたは、男の雄弁さをも超越している。

私は、私の悪い弟のせいで昼夜びくびくしながら怯えていた。私が穏やかに治めていた村をあなたは腹立たしく思い、ひどい戦や戦いが自分の村に起こらないかを密かに危惧していた。二つ三つの大昔からずっと神々の間まで評判が立った。

### 「私の語り」

年若い淑女は、私を感心し褒め称えた。横座に座った神のようなお方は、言い返す言葉もなく後悔し、顔を上げることもできず、涙を流しているのを見た。私は、二つ三つの良い事を言って外へ出た。私は、櫓の上から突然、天空上へ高く舞い上がった。私にはどの様な憑き神がついているのであろうか、頭上で突然裂けるような音が響いた。尊い二～三柱の神々が爆発音をたて、神風の前で私は破裂した。ポンモシリウンクル、神のようなお方が犯した

悪い事があり、後悔し過ぎて病気になる、神の前で私が話したことで気が滅入ったことであろう。更に、私は、ポンモシリウンクルが涙と一緒に一言も話さなかった事を心の中で気の毒に思った。どういう生まれでどういう育ちの人が「断崖の神」なのであろうか。「断崖の神」のせいで、年若い私の悪い姉も私について事実を話すと、私は、私の悪い兄に恐ろしい事をされたので腹立たしく思った。私は、久しいあいだ海の底で死んでしまうと考えているのだろうか。私はひどく腹を立てたので、私の憑き神が二つ三つの猛々しい音を立てた。その音が私の頭上で響き、二つ三つの渦巻く風が私の前で吹き起こった。林に吹き付ける風は、はたはたと鳴り響き、大地に当たる風は、ゴーゴーと鳴り響いた。私がトミサンベチへ戻る音が、私の耳元に巻き起こった。私は、陸の人の国の大地のてっぺんに向かって昇って行った。私の住居トミサンベチ、神の立派な岩山の真ん中まで黒い霧がむらむらと立ち込めていた。その時、トミサンベチ川の水源へ神々が降臨される破裂音が鳴り響いた。少ない人数であればよいが、大勢の勇者が集まったので、神が造った天は粉々となり勇者ともども一緒に崩れ落ちた。川の途中まで行くと、神々のいくさが激しく一斉に起こった。強さが同じくらいの勇者だったので、林に当たる風はがりがりとなり鳴り響いた。死者の国へ行く殺された勇者の音が、ゴーゴーと鳴り響いた。私は、天空でじっとしたまま、耳を澄ませて聞いていた。私は、何者かと国の上手と下手の間を追いかけ合って、その何者かを踏みつけて死者の国へ追いやった。国の上手に顔を出す者を踏みつけ、国の下手に顔を出す者を踏みつけ、という行為を数十回と繰り返した。私に踏みつけられた者たちは、湿った死者の国へ行く音を立てた。その音が、ぼこぼここと鳴り渡った。二〜三柱の神々が亡くなられた音がひっきりなしに響いた。遙か彼方にある湿った死者の国へ沈んでいく音のあとにさっと空が晴れ渡った。湿地の国から引き返して何者かが川を下る風に身を任せて、降臨される音がゴーゴーと鳴り響いた。私たちの住み家の他の所へやって来るならばよいが、神の御座所に入って行ったのが、私には分かった。私は、神雲の上から一瞬でシヌタツカの外の櫓へ移動した。どうしたことであろうか、神の立派な御座所は長い間、火がなく煙も出しておらず不思議に思った。私は、戸口から家の中へ飛び込んだ。同時に何者かが天上の煙出し穴から降りて来て横座の上へ落ちた。そこで鉢合わせとなり、庭の上から光と霧と共にさっと押し入った。私の傍らの寝台の上には、「育ての兄」が頭とお尻だけ鼓動をうち、寝間着の小袖で覆われた状態で寝ていた。右座の衣装掛けの竿の下には、年若い私の姉（いとこ娘）が寝ていた。目を凝らして見てみたが、酒宴の後も認められず、私がいなくなった頃から寝たものらしかった。横座の上に落ちた者も、私と同じように茫然と立ち尽くした。その者は、小山のような薄くかける霧を身にまとい横座に座っている。武具の触れ合う金属音に続き、神が話す若い声が響いた。

#### 「ポンモシリウンクルの語り」

『「トミサンベチシヌタツカの私の妹よ、早く火を焚いて薬を作りなさい。あなたの「育ての兄」とあなたの「年若い姉」を生き返らせ、私は人間の話をするつもりです。』と。

#### 「私の語り」

『「断崖の神がこの村へ降臨される音であると、私には分かります。私は、恐れ慎みなが

ら急いでその火を掘り起こし、それから薬をつくる小さい鍋を炉火の上に掛けた。私は、「年若い私の姉」に跳びつき、「私の姉よ、起きて下さい」と言った。「あなたは、いったい何の病気、何を患っているのだろうか」と。私はあなたの妹です。』と言って、私は姉に薬を捧げるつもりでいたのに、姉は体を左右に振ってかすかな言葉で次のように言った。

#### 「年若い私の姉（私の従姉妹）」の語り

「私の同族の人たちよ。私にいつまでこのように昼夜を問わず、辛い思いをさせるのであろうか。今の今まで、この国の上に神の私の妹が活着ているので、もし私が死んだのなら、ここから遠くか、あるいは近くかは分からないが、私の妹を探し回ることばかり、所望して私はいた。」と。

#### 「私の語り」

「私は心の中で姉を可哀想に思い、私は姉を憎んでいたもので、少し返礼することを声高に語った。件（くだん）の「年若い私の姉」は、嘆き悲しんで本当に死ぬちょっと前であった。

反対に私は泣きたいほどに苦しみ、私は姉をやたらと引っ張り、二つ三つのよいことを幾度となく言うと、姉は不思議に思い、身八口から私を見ているように思った。（喪に服している人が取る行動、姉は妹が死んでいると思っている。）姉は衰弱していたので、死んだようだったが、不意に寝床の上に立ちあがり、「フッサによって妹は生きていたのだろう」と姉は思った。姉は私に向かって「妹よ」「心臓よ」と言って、私を押さえると萎れた草のように私の上へ崩れ落ちた。姉は二～三度死んだが、私は良い薬を姉の口に注ぎ治療した。私は姉に二つ三つのフッサをして抱き入れた。

私の「育ての兄」にしても、身八口から私を見た。「育ての兄」は、横座に座る断崖絶壁の神の霧でも見たようで、寝台の上でこっそり立ち上がり着替えをしてから右座の傍へ座った。「育ての兄」へ「兄さんよ」と絶叫し両膝の上へ行くと、私を憐れむ気持ちがあったならばよいが、「育ての兄」はとても後悔していたので、私の方へ顔を上げることも出来なかった。「妹よ」「心臓よ」と言って、私を撫でさすった。

#### 「育ての兄の語り」

「私は、神は何でもお見通しであると考え、私はただの人間であった。どんな悪い心も少しも持たないと思っていたが、愚かにも「年若い妹」を舟に乗せて流してしまい、海の底に沈んでいるものと思った。その行為に後悔し、仲間と一緒に妹を探したが見つけられなかった。私の妹が立派であったため嫉まれた、と私は思った。

#### 「年若い私の姉（私の従姉妹）」の語り

「私は生きながらえとは思わずに私も死ぬと思い、布団を被って寝込んだが、それでは死ぬことは出来なかった。そうこうしているうちに私の妹がこっそり訪ねてきたが、嘘か真かが分からなかった。断崖の神の所でも、私は言い返す言葉もなく、どのようにすべきなのだろうか。「私は自分が死んだとき、初めて謝罪する」、と考えていた、と言って私を撫でさすった。その時、横座に着座している者を覆っている二つ三つの霧の中心を掻き散らした。

しかし、二～三度と人間の形にすることが出来なかった。暫くの間、何度か同じことを試

みて、ようやく霧を払いポンモシルンクル（神のようなお方）だと分かった。ポンモシルンクル神は美貌の持ち主で、私は遠く探し求めていたが、この美貌に匹敵する者がいるだろうかと思った。ポンモシルンクル神は年若い少年で、黄金の小袖を全身に襲ね着していた。腰には黄金の鎖を巻き、神授の宝刀を腰に差し、黄金の小笠を被り垂れた紐できつく締めていた。笠の縁の脇には神々しい顔が、天の太陽のように照り返し、神の顔つきをしている。勇者の顔つきの顔色が違って、疲れた様子で顔色が優れなかった。私たちは、お互いに挨拶をしたが、ポンモシルンクル神は私を不憫に思い、顔が消え失せるように俯いていた。類い稀な勇者の顔の表は、さびしく黙り込み涙を流し、神のようなお方が話したのは次のようであった。

### 「ポンモシルンクル（神のようなお方）の語り」

「トミサンベチシヌタツカの神のようなお方よ。私が話すのでよく聞きなさい。『私は断崖の神であり、人間の国を私は見守っていたが、いろいろな事で私は忙しく、急に振り向きもしなかった。』と。先祖の言葉は次のようであった。

『「年若い妹」を揺りかごの頃から私は面倒をみて育てた。私は、もう一人前の男に成長した。あなたの妹が、私の住処にやって来る前に、まず私が先に遊びに行き一緒に楽しく語り合うことばかりを思っていた。私は、妹と一緒に暮らしていたところ、今日の晩方、沖の国の腹を立てた神が、神風を走らせ昇る音を聞いた。陸の人の憑き神であることを承知しています。』と。今日、初めて私は、人間の村へ顔を向けて目を凝らしたところ、村の真ん中にある神の立派な御座所には火の気がなく、驚いて家の中へ入ると、私たちは討ちあった。

話は斯く斯く然々であった。なぜ、あなたは「年若い妹」を舟と一緒に流したのかその理由を探った。すると、トミサンベチ川の途中に住む狐神は大変凶暴であった。その狐神が、神の世界でお嫁さんを探したが、自分にふさわしい人は一人もいなかった。狐神は、人間の村を見て調べたところ、あなたの「年若い妹」を見つけ、その妹を殺しその魂を神の世界へ連れて行き結婚しようと企んだ。見物の神々がたくさんいらして、あなたの「年若い妹」を連れて逃げたいと考えていたが、臆病になり恐ろしいことをいろいろ巡らしながらいたところ、あなたは交易に出かけたのです。

### 「狐神の語り」

「年上のあなたの妹」を、まったく不意に惑わして嘘を言わせた。あなたは腹を立てて、あなたの妹を一太刀に斬り殺すならば、そこでその魂を奪うつもりでいた。ところが、あなたとあなたの「年若い妹」の憑き神が強かったので、幸運にもあなたの「年若い妹」は舟と一緒に流された。私は、あなたの「年若い妹」と舟と一緒に海の底をひっくり返すのは容易いと考えた。あなたの「年若い妹」は、海の中でも神のような人だったので、あなたの「年若い妹」が海で死ぬことに神々が身震いし、幸運にも遥かに遠い「ポンモシリ」（私たちが拝む大地）にあなたの「年若い妹」と舟が漂着したのです。

### 「ポンモシルンクル（神のようなお方）の語り」

狐神（魔神）の行いによって、ポンモシリでの出来事や、あなたの「年若い妹」が腹を立

て悔しい思いでシヌタヅカへ攻撃しに戻って来る音を聞いて、初めて事の顛末を知り、魔神と一緒に私たちは交互に立ち決闘を繰り広げた。そして、長い時間をかけてようやく魔神をたたき殺した。今まで悪神（狐神）は、神々の目先に霧を張り巡らしていたが、神々はその悪事を知る事となった。悪神（狐神）は、ひどい罰が当たり、遙か遠い死者の国へ蹴落とされた。

### 「断崖の神の語り」

『「私も悪いのです。私がもう少し早く遊びに行ったならば、あなたたちは心を痛めることもなく暮らしていたはずなのです。私はあなたたちに謝罪します。』』と言って、私の「育ての兄」に礼拝し挨拶をした。

### 「私の語り」

私は、「断崖の神」の話聞いた。そして私たちは皆で驚いた。私はどのような容貌を持ち、その容貌によって、悪神が私の「年若い姉」と私の「育ての兄」を惑わし、私の身のの上に起こった事柄を理解している。私の「育ての兄」も「年若い私の姉」も共に衰弱しながら忌々しく思った。ただの人間で目先の短いものだった。気づくと魔神の悪い料簡があったからこのようになった。

### 「年若い私の姉（私の従姉妹）」の語り

私は、私の妹をいじめたことと泣かせたことを「育ての兄」に言った。妒縁の後方を踏みながら「魔人は本当にいい気味だ！」と唱えた。魔神にしても結婚して人間の国の表に働きに来たならば、それで幸せに暮らしているものの身体と後悔と一緒に、死者の国へ魔人を入れたことだった。私たちは、幸いにも断崖の神がいてくれたおかげでみんな一緒に生きながらえ、戦争の原因も私には分かっている。」と言った。私たちは、断崖の神に感謝した。

### 「私の語り」

私は、断崖の神に感謝したが断崖の神を恐れ慎んでいたもので、一言も発することが出来なかった。「育ての兄」と「年若い私の姉」は、私を二～三度と撫でさすった。それから私は、ポンモシリ村へ行って今までの経緯を正直に話してきます。「育ての兄」と「年若い私の姉」は、私に感謝した。私は「育ての兄」によい薬を飲ませた。「育ての兄」と「年若い私の姉」は、長いあいだ食事を取っていないので、骨に皮が覆い被さった状態だった。私は下座へ行き、二つ三つの水の滴をしたたらせ炊事の準備をした。私たちは食事を取ったが、断崖の神はよくしゃべり、私と二つ三つの笑い話を交えた。無垢である私は、断崖の神を見ることも出来ず、食後の跡片付けをした。断崖の神は、自分の村へ戻ると言って「また、何度も私たちは一緒に仲良く会いましょう」と言って立ち上がった。私の「育ての兄」は次のように言った。

### 「育ての兄の語り」

『「もう少し経って、私が元気になったら少しの酒を醸し、断崖の神を招待しましょう。ポンモシリの神のようなお方もみんな招待して、返礼するつもりです。』』と。

### 「私の語り」

「育ての兄」の言葉を聞いた断崖の神はとても喜んだ。

### 「断崖の神の語り」

「そうだ。」と言って、断崖の神は、外に出て横目を使ってみると、どのような神が私を差し置いておこなったのか。私とその神のおもてを見ると、顔がさっと青ざめて、私の手前の所に視線を低くし伏せた。私は反対の方向へ行く事が出来ないように思い、外へ出て行った。

### 「私の語り」

私は、外の檜の上から天空上にさっと昇り、神がお造りになった天が、みなもろとも崩れ落ちる音がゴーゴーと鳴り響いた。私は、はるか遠い川の水源地上で一休みし、トミサンペチシヌタツカ村へ着いた。私は、毎日食事の準備をして、私の「育ての兄」や「年若い私の姉」の看病をした。今では二人ともすっかり元気になった。私の「育ての兄」は次のように言った。

### 「育ての兄の語り」

『「さあ早く、穀物の残り物でもあるのなら、それを下ろして酒を醸しなさい』と。

### 「私の語り」

私の「育ての兄」の言葉を聞き、私はとても喜んだ。「年若い私の姉」は、すぐに外に出て行き、自分の村の上手と下手に大声で呼びかけた。呼びかけを聞いた私の同族たちは、「普通の男」と「普通の淑女」たちが集まった。男たちは木幣を削るための木を伐ったりと何でも手伝い、女たちは穀物を精白したり水汲みをしながら協力しあい、私は酒を醸した。私は「年若い私の姉」と一緒に頑張り、しばらくして大きな行器六つのお酒を上座に置き、私は安心した。

夜になると「断崖の神」と「年若い私の兄」が私の両腕の間に伴って、私の顔の前に二人が現れ、私の腕の力が抜けた。神とは、人間のような者を言うのだ、と私は思っていたが、私たちが祈る神が、生まれたと思われる者は、いろいろな勇敢さ霊力のあることに、驚いた。私は、自分自身を惨めに思い、また、つまらない様をみて、自分自身を不憫に思った。神でも相手のいう事を聞くために、見ない振りをして、私と話したくとも一言もかけずにいる。さあ早く、他人のいない所で私たちは会って、「斯く斯く然々」と私が考えていることをお互いに話したいと考えたが、寝床の上で涙に泣き暮れて、毎晩眠ることも出来ず、私の心は縛（もつ）れた。今から二～三日後には、おいしいお酒、酒の匂いが風となって家の中に充滿した。お酒は神が飲みたがるものの一つだ。家の中には少数の人々が入って来て、木幣を削る音や酒を搾る筧の音が聞こえ、これらの音が相和して起こり鳴り響いた。私はとても気持ち良かった。しばらくして家の中は新しい木幣で飾られ、家の中は白い霧で満ち溢れた。

家の中では神の美しい光がともに輝き、私はとても気持ち良かった。

### 「育ての兄の語り」

私は、酒宴の支度を終えた。ボンレプンの村に言づてで「断崖の神」と「私の年若い妹」

の二人を招待し、みんな酒宴の時には襲ね着した盛装をした。私たちは神のような出で立ちだった。

### 「私の語り」

遠い国の上で破裂音が響き渡り、神がいらっしゃる音がゴゴと鳴り響いた。ちょうどその時、川の水源地で破裂音が響き渡り、神々が降臨される音がゴゴと鳴り響いた。二つ三つと渦巻ながら吹く風が自らの前の方に集まり、城に当たる風は、はたはたと鳴り響き、大地に当たる風は、ゴゴと鳴り響いた。何者かが次から次と外の櫓の上に降り立った。

家のすぐそばで男の方は太刀の鏝の音が美しく響き、女の方は懐刀が美しく鳴り響き、私はとても気持ちが良かった。玄関の入口の所で訪問の際の礼儀である咳払いを次から次と行っている。武具の触れ合う金属音とともに庭の上に何者かが光と霧とともにさっと入って来た。私は、髪の毛の隙間からじっと見てみると、断崖の神が酒宴の盛装でのお出まじだった。尚一層、神々しく見えた。断崖の神の背中にその神の妹、年若い女が背負われていた。神の妹は、薄くかげる霧で自分自身を隠していた。その妹は、神の顔つきで、絹のような神の髪の毛でその頭を覆っている。神々しい顔が日光のように光り輝いている。その妹が黄金の小さい行器を腋の下から手に持ちかえて家の中へ入って来た。それに続いてポンモシウソウクルの兄弟が入って来て、次にポンモシリウソウマツが左座へ遠慮とともに座った。横座の上で、私の「育ての兄」が、柄の短い槍を杖として使い、槍の尾の端に顎を乗せて抗議する言葉がカッコウの声のごとく響き渡った。『私は断崖の神と一緒に育てられた。魔人が私を嫉みいろいろな経過を辿り、私はポンモシリ村（私たちが祈る大地）へ漂って行き、私を生き返らせてくれたこと。私は、その事に感謝している。神のようなお方は、お互いに「叡智に富んでいる」または「互いを見合った」と褒め称えた。』と。これから私たちは兄弟姉妹になり、食べ物をつかち合い、お互いに行き来し合うようになること承知していた。私はほんとうに嬉しく思った。女の方もまた異なった土のように私たちは互いに挨拶をし、私たちは撫でさすり合った。男たちにしても互いの手先の上を一緒に撫でさすり合った。私の「育ての兄」は、手を高く持ち上げてポンモシリウソウマツに挨拶し、多くの事を彼女に感謝した。

「年若い私の姉」は、泣きながら多くの事に感謝し、「断崖の神の妹」は、私の「育ての兄」から挨拶された。私の同族の人たちは酒宴の盛装を下から襲ね着し、それこそ神のように大勢の人々が集まり長い酒宴の座が伸びている。断崖の神の美しい手を私は高く捧げ、行器の後ろで私は敬意を払いポンモシリの神のようなお方に向かって私を育てた兄は酒を出し、「年若い私の姉」は、酒宴の座の間をあちらこちらと行き秀樽（ほだり）を自分の腋の下そして手に持ってお酌をしている。私は横目で見てみると、ポンモシリウソウクルの「年少の方」が、ほんとうに痩せていて顔色が優れず、元気のない様子を見て可哀想に思った。私は、ポンモシリウソウクルの「年少の方」が、いつも私のことを考えていると、承知しています。

その「年少の方」は、私が美しくつくった衣装を一番上に着ていたもので、私を頼りにしていることは分かった。私が一緒に育った神（断崖の神）が人間の家に下って来て、その仲間

に加わったことを見るならば諦めるであろう。私は心の中でその「年少の方」を気の毒に思った。私たちは、神への祈祷の儀式や先祖供養などみなことごとく終えて安心した。珍しい酒、神の酒を私たちは一緒に一献を傾けた。私は、今初めて酒と呼ばれるものを飲んでみると味がよくて気持ち良かった。酒かすも美味しかった。「断崖の神の妹」は今初めて人間の酒宴や遊びに加わり、ほんとうに心の中から喜んでいることが私には分かった。

「断崖の神の妹」は、人間の淑女たちに混じって二つ三つの笑い言葉を交わし、尚一層神の出で立ちだった。酒宴の半ばに達した頃、断崖の神は酒杯を高く持ち上げてボンモシリウンマツを大声で呼んだ。ボンモシリウンマツは、ひどく驚き、遠慮とともに膝でずり寄って行き酒杯の下で拝礼し、酒杯を受け取り杯の上を撫でて次のように言った。

#### 「断崖の神の語り」

「ボンモシリウンマツ、よく聞いて下さい。私は神であったが、今は人間である。私は、神でも人間でも一番喜ぶことを知っている。トミサンペチの神の勇者（私の「育ての兄」）にボンモシリウンマツが炊事の用意をして下さい。すなわち、二人は結婚するのです。

#### 「私の語り」

ボンモシリウンマツはとても喜び、陰で微笑し酒杯を返した。私の「育ての兄」は、腰を屈めて妻を娶る拝礼をボンモシリウンマツにした。私は、ボンモシリウンマツが心の底から喜んでいるのが分かった。断崖の神が酒杯を高く持ち上げて、「年若い私の姉」を大声で呼んだ。

#### 「断崖の神の語り」

「年若い私の姉」に向かって、『「ボンモシリウンクルの年上の男に炊事をするように頼みます』』と言った。

#### 「私の語り」

すなわち、「年若い私の姉」と「ボンモシリウンクルの年上の男」と結婚することになった。

「年若い私の姉」はとても喜び「ボンモシリウンクルの年上の男」は腰を屈めて喜びながら妻を娶る拝礼をした。

#### 「ボンモシリウンクルの年上の男の語り」

よく聞いて下さい、私の妹よ。『私の妹、あなたは、神々の中へ嫁入りするはずだったが、理由があって、人間の仲間に加わった。人間の男でも女でも神よりも美貌や心の美しさにおいて、神を凌いでいる。』と私は知っている。私はこの事に驚嘆した。『あなたも、私と同じように考えていることが、私には分かった。』と。私は、これから長いあいだ人間の国のおもてへ仕事に行きます。あなたは、人間の国に嫁入りしたならば、いつも私たちは会うことが出来る。

#### 「断崖の神の語り」

私は、「ボンモシリウンクルの年少の男」が恋煩いをしていることを気の毒に思い、「私の妹」が神の行いをすることが出来て「ボンモシリウンクルの年少の男」神のようなお方に炊事を用意して下さい。」と言った。すなわち、「ボンモシリウンクルの年少の男」と「断崖の

神の妹」が結婚することになった。『「私の妹」は神よりも立派な夫を持つのです。』と言った。「私の妹」は、心の底から喜んでいるのが分かった。「ポンモシリウソウの年少の男」は、それを聞いてほんとうに驚き、恥ずかしさと喜びが半々であることが私にはよく分かった。

### 「私の語り」

私は心の底からほんとう喜び、私の悪い思惑でずいぶん長いあいだ気が滅入っていた。断崖の神は、心が美しく何でも見抜いているので、良い具合に考慮し予測していたことに私は、感謝した。私の「育ての兄」は二十～三十の拝礼をして「断崖の神」をねぎらい神々に感謝し、私の同族の人たちが結婚して暮らしている。断崖の神が、良い具合に結婚相手を指名し、大勢の者が、遠慮とともに拝礼し喜び私は安心した。私の同族の人たちは、みんなとても感謝し拝礼しながら帰って行った。そのあとで自分たちだけ同胞のように毎日おいしい食事を取り、楽しい酒宴を開いた。男たちと女たちはそれぞれに悪いことでも良いことでも色々な話し合いを楽しんだ。私は、今初めて断崖の神を近くで見た。断崖の神は、どのような神なのだろうか私は褒め称えようもないほど驚いた。断崖の神は、どのような病気が何を患っているのだろうか。私は、見て調べてみると少し痩せている。私は、二つ三つの笑い言葉を断崖の神と交わしたが心の奥では滅入っているのが分かった。断崖の神は、この大きい酒杯に渡された捧酒箸の上まで溢れるくらい酒を注ぎ、酒杯を高く差し上げ私を呼んだ。遠慮とともに私はずって行き、酒杯の下に頭を垂れ、私は酒杯を受け取った。私は、それを高く低く捧げて、拝礼してから少し飲んだ。それから私は飲みさしの酒を持ち帰った。

### 「断崖の神の語り」

断崖の神は、酒杯の上を撫でながら次のように言った。『神でも人間でも知っているように、私とあなたは一緒に成長した者なのです。あなたが流れおえたなら、すぐに来るでしょう。』と言った。

### 「私の語り」

私はゆっくりと返事をした。お互いに抱き合いたいと思ったが私は出来ず、私たちは楽しく語り合った。勇者ばかりが肩を並べて座った。誰一人装束や美貌で優劣があるだろうか。

同じくらいの容貌の勇者であっても断崖の神は神であるから美貌や装束において優っていた。人間の女も美貌の優劣はなかった。断崖の神の妹は、美貌と衣装は優っており驚いた。

その断崖の神の妹は、神なのでとても美しく、その上人間を好きになってくれた事に私は感謝した。「年若い私の姉」は、大きい長持ちの真ん中へ背負い縄をかけた。「年若い私の姉」をポンモシリへ連れて行き、ポンモシリウソウもトミサンペチシヌタブカへ戻って来るとも、断崖の神の妹もポンモシリへ行く事を知っている。みんなで心を和ませ「私たちはまた会いましょう」と言って、それぞれ別別（べつべつ）になった。私は、断崖の神と密かに心の中で別れ別れになってしまう事もできず、後ろに振り向き二つ三つの澄んだ涙を落とした。断崖の神も私に背を向けて、目元の上を潤ませて、はるか遠くに行ってしまった。二～三日後に私の「育ての兄」は次のように言った。

### 「育ての兄の語り」

『すぐにポンモシリウンマツが戻ってくるでしょう。あなたも（私を指す）荷物を作り断崖の神へ会いに行きなさい。』と言った。

### 「私の語り」

兄の言葉の前に立ちあがり、古い長持ちにいろいろな女の宝物や美しい絹織物の反物などを一杯に詰めて背負うように荷物を作った。ある日、神がお昇りになる音がゴーゴート、また、川の水源地から破裂音が、そして神の降臨される音がゴーゴートと鳴り響いた。私の「育ての兄」は、沖の国へ音を跳ばし、口元をほころばせて『断崖の神の妹が、今初めて嫁に行くような気がする。』と言った。そのとき、外の櫓の上に神が降臨される音が美しく鳴り響き、私は荷物を背負って私の「育ての兄」に別れを告げて、外に出た。庭では、ポンモシリウンマツ神が小さい長持ちを自分のそばに置いて髪の毛の端を地面につけていた。私は彼女に挨拶し、『家の中へお入りください』と言った。私は、櫓の上から天空上に飛び上がった。私の頭上で破裂音が響き二～三柱の尊い神々が私の遙か上方にお集まりになった。川の水源地へ私が飛んで行く音がゴーゴートと鳴り響いた。飛んで行く最中に私の山の山地を見ると、驚いたことに神がお造りになった美しい林の上はずっと平坦になっており、林の上で美しい小さい鳥たちが群れになりその鳴き声が黄金の沢のように美しく響いた。私はとても気持ちがよくなり、川の水源地に到着した。神の峰が出ている様子は立派で美しかった。峰の頂きには黄金の家と城が重なり合うようにして立ち並んでいた。天空上には堂々と立派で美しい丸山の下には神がお造りになった絶壁がある。その絶壁の下には大きな淵を広々と見渡すことができ淵の上には水が流れている。くちやくちや鳴らして物を食べながら崖の途中から一緒に飛び跳ね一緒に昇った。その音が国中にゴーゴートと鳴り響き、驚嘆し私はとても気持ちがよくなった。外の櫓の上に鳥が止まる如しに私は見てみた。すると神の御座所である家や城の外側はきれいに整備され、大いに感心し、私は城のすぐそばに座った。そのときに家の中から「断崖の神」の声が美しく響き、話しは次のようであった。

『私の妹（主人公の私。結婚相手を「妹」と呼ぶ場合がある）よ、招待した人は誰もいないので、入って来て下さい。』と言った。そう言われたが、恥ずかしい気持ちだったが、荷物を引きずって、玄関の入口から神や家宝のかおりの烈風が吹いて来て、私は後ろに後ずさりした。戸口に掛かっている黄金のすだれが落ちてくる様子は、きらきらと光り輝いていた。

私は遠慮とともに二～三度と戸口のすだれを持ち上げ敷居を跨いで越えた。私は、宝壇の手前に見当をつけて近づいた。何者かが起き上がる音がして、太刀の鏗の音が美しく響いた。

私は、抱きかかえられ荷物と一緒に右座に運ばれた。私は、萎れた草のようにぐったりとなり倒れ込んだ。神のかおりが、私を生き返らせる風となり私を後に後ずさりさせた。私は、振り向いて見ると「断崖の神」であった。「断崖の神」は、笑みをたたえていたが、顔色がすぐれなかった。「妹よ。」「心臓よ。」と言って私の上に崩れ落ちた。私は、他人がいないところなので、「神の年若い兄よ。」「心臓よ。」と言って、兄の両膝の上に身を投げ出した。「断崖の神」は、二つ三つの声なき涙を私の上に落とし、二度三度と私を撫でさすった。そして、

私に接吻をしてきたので、私も接吻を返し挨拶をした。「断崖の神」は次のように言った。

『私の妹、あなたは本当に美しいのです。魔神に魂を奪われそうになったり、妬まれたりしたのです。あなたは、神よりも美しいのです。私は首領の子孫であるが、あなたに恋煩いをして痩せ細ったのだ。』と言った。「断崖の神」の恥ずかしそうにあざ笑う声が響いた。私も同じように思っていると伝え、私たちは普通に祝福し合った。「断崖の神」の病気は悪かった。これから私たちは夫婦になるのです。＜終わり＞